

OcuacNews

1998.2.1

23

北疆 3,500キロ・ツーリングの旅 1997年(夏)

廣谷光一郎

— 解 説 —

新疆ウイグル自治区は中国総面積の6分の1、国境はモンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジクスタン、パキスタン、アフガニスタン、インドの8ヶ国に接し、国境線は5,000キロ余、そのため山岳地形は首都ウルムチからみて、東北にアルタイ山脈、西に天山山脈、パミール高原、西南にカラコルム山脈、南にチベット高原、コンロン山脈と我々にとっては憧れの地域でもある。

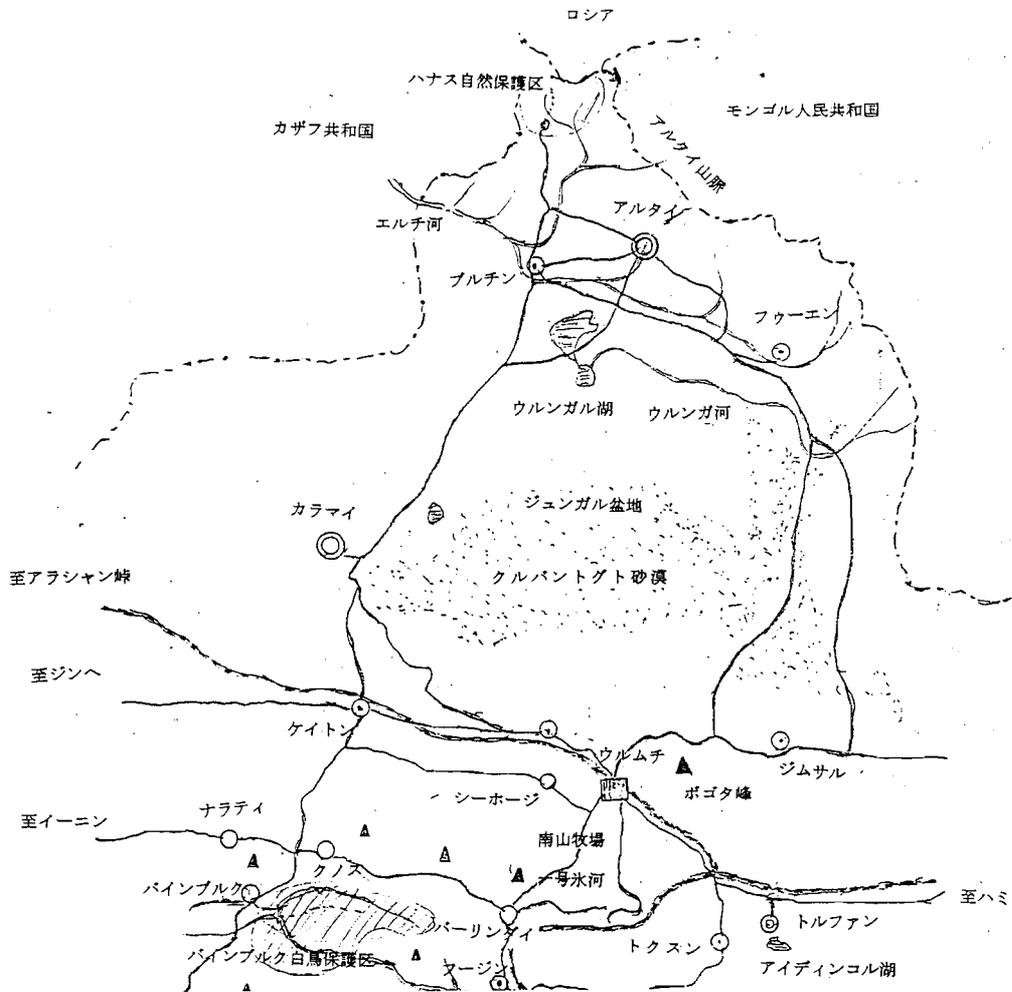
また、新疆は多民族の国で、人口1,500万人。民族はウイグル族、漢族、カザフ族、回族、蒙古族、キルギス族、シーボ族、タジク族、ウズベク族、タタール族、ダフル族、満族、ロシア族の13民族からなっており、最も多いのがウイグル族の600万人、続いて漢族の450万人である。従って、生活習慣、食生活、宗教も様々で、特に宗教と政治の問題で民族抗争の絶えない地である。

歴史的には前漢（紀元前100年）の武帝が支配して以来、50～100年毎に支配者が交代し、今世紀まで戦乱が続いているのが現実で、ここに中国を見たという感である。

— 紀 行 —

グループの隊長は川上隆（JAC会員、防大山岳会顧問 72才）。1981年のコンクール峰遠征時より新疆登山協会と親交があり、今回の企画も協会との一年に亘る交渉で許可を得た。長尾悌夫（JAC、慈恵会医大山岳会 67才）、浜野義三（フリー 67才）、竹田寛次（JAC、早大山岳会 64才）、奈良原町子（JAC、早大山岳会 57才）、福島兆子（フリー 57才）、そして私。平均年齢63才のチームである。

目的はアルタイ山脈の最北部にブルチン河の源流を形成する哈拉斯（ハラス）氷河を見る事と、国境の山々を見聞しようというのである。



8月17日 関空、北京と乗り継いで北京時間18時40分にはウルムチ空港に到着し、新疆登山協会の副会長アルスラン氏（全行程同行）らに迎えられた。

翌8月18日よりいよいよ出発である。私たちはトヨタのランド・クルーザー2台に分乗して、まずはクルバントグト砂漠の縦断にとりかかった。

砂漠はアスファルト舗装されているところが多いが、地図には記載されていないルートもできていた。地平線に向かってどこまでも真っ直ぐに伸びた道、乾いた大地に所々に生える草木、緩やかにうねる丘陵、砂礫は褐色、赤色、緑色、白色、オレンジ色と変化する。とにかく広い、大きい。私たちは砂漠のオアシスにできた町、フーエンアルタイを經由して北上を続けた。

8月21日、我々は待望の哈納斯（ハナス）自然保護区に入ることになった。

アルタイを出発して約1時間半、ハナス自然保護区への入り口、ブルチンに到着。新疆登山協会のアルスラン氏らが保護区の立入りとブルチン河の源流にあるハナス氷河踏査の許可確認のため公

安におもむいたところ、この企画を提案した新疆登山協会も当事者である私たちも大きな誤算をしていることを知らされたのである。即ち、目的とする氷河は保護区内の基地であるハナスより騎馬隊でも片道3日は要するというのである。しかも、ハナス原生林は地元のモンゴル民族やカザフ民族の放牧のための踏み跡が一部にあるのみで、調査に入った隊も殆どないとのも事であった。従って、私たちが騎馬隊を編成したとしても熟練度から推しても、往復10日間はかかるかと予測され、当初の計画は断念せざるを得なくなったのである。

それにしても、情報の極めて少ない地域への進入が如何に難しいかを再認識させられたのであった。

私たちは気をとり直し、ブルチンを11時に出発、北方140キロメートルに位置するハナス自然保護区に向かった。市街を出ると間もなく、エルチス河にかかったシアウホ大橋を渡る。この河は新疆第二の大河と言われ、全長2,969キロメートル、アルタイ山脈西面から西北に流出し、遠く北極海に注ぐのである。ランド・クルーザーは草原に縦横無尽にできた轍（わだち）を、もうもうと砂塵

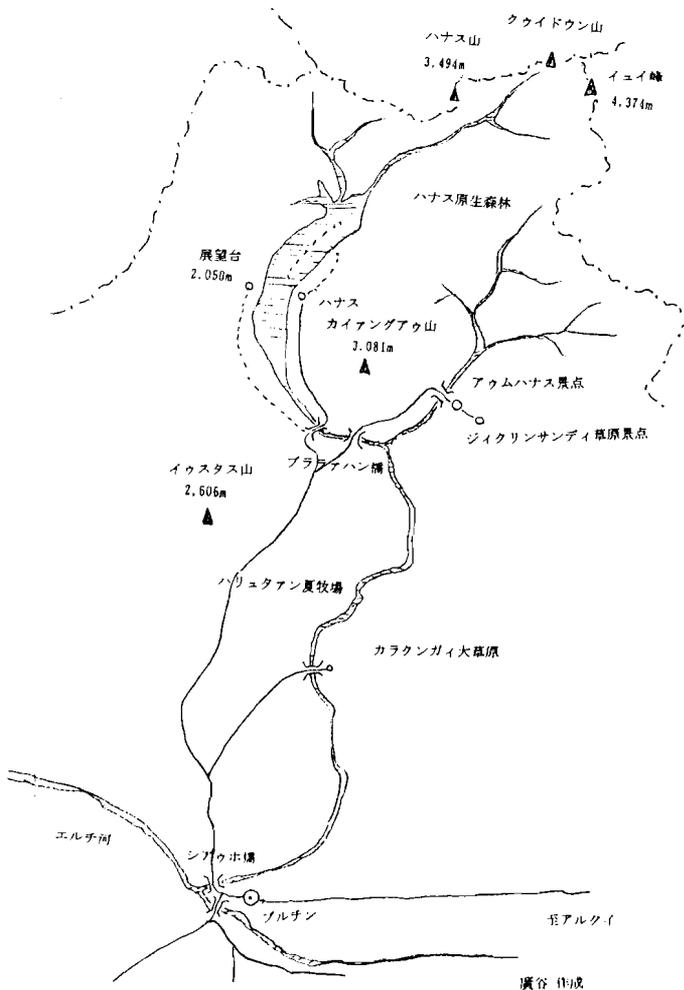
を上げながら快調に北上、追いつ追われつのラリーを楽しんだ。山塊が近づき、山峽の入口に設けられた検問所（高度830メートル）を12時に通過し、間もなく今にも崩れそうな大小様々な岩石の積み上がった石楼のような山道が続き、更に葛折りを登り切ると、そこは目を見張るようなハリユタン夏牧場であった。海拔1,300メートル～1,800メートルの広大な高原は草原からなっており、あちこちに遊牧民のパオ（包）が点々とし、牛や馬、羊、ラクダが放牧されている。私たちは高原を走り、山を越え、道を間違えながらも午後3時にはハナスに入るブララアハン橋を渡り、午後3時40分にはハナス自然保護区の基地、ハナス（海拔1,380メートル）に到着した。

ハナス自然保護区は北にロシア、東にモンゴル、西にカザフスタンの国境に接し、いわばトライアングル地帯である。中央にハナス湖、北東の方位にハナス山（3,494メートル）そしてアルタイ山脈の最西北部に位置する国境に最高峰、友誼（イユイ）峰4,374メートルがある。資料によれば、

イユイ峰を中心とする山域の高度3,500メートルから上部は夏も氷雪に覆われ、谷筋には圏谷（カール）氷河が発達し、当初、私たちが目指していたハナス氷河は北緯49度7分南緯87度47分にあり、雪線高度3,200メートル、氷河末端高度2,416メートル、長さ10キロメートル余、新疆の多くの氷河の中では最も低所まで流出している氷河とあった。私たちが着いたハナス招待所は2ヶ所に分かれており、上部のエリアに逗留することになった。

入口より正面の従業員宿舎まで約300メートル、左側に建築したばかりの二階建バンガロー2棟、その奥にメインの招待宿泊所があり、右側はなだらかな牧草地となっている。この90,000～120,000平方メートルはあろうかと思われるハナス上部エリアの基地は、湖面より30メートル程の高台になっており、非常に落ち着きのある環境である。収容人数はメインの招待宿泊所が約25名、バンガローは約10名位で、従業員は約15名が常駐している様子であった。尚、下部エリアは徒歩5分の位置にあり、パオ、テント、簡易宿泊施設などで50名～70名は宿泊できるようになっていた。

ハナス自然保護区略図



8月22日 ハナス湖最奥部をせめて船上からでも視察したいという私たちの希望が聞き入れられた。栈橋より15名乗りの焼玉エンジンの漁船で午前10時50分出発、往復可能（燃料の都合による）な最奥部に午後12時20分に到着、そこからは国境稜線の山々は遥か遠く、念願のハナス氷河を見ることはできなかった。しかし、おりしも紅葉のシーズン、兩岸の原生林はポプラ、白樺を中心とする赤、青、黄と見事な紅葉を楽しみながら引き返して栈橋に到着したのは午後1時50分であった。

ハナス湖はモンゴル語で、美しく神秘的な湖の意味である。湖面は海拔1,374メートルの高所にあり、半月の形で、長さ24.5キロメートル、幅1.6～2.9キロメートル、面積45.7平方キロメートルでハナス自然保護区の総面積5,584平方キロメートルの8パーセントを占めている。最も深いところは188.4メートルあり、中国で一番深い高山の湖である。

ハナス湖は古代より氷河の溶ける水が谷にたまることによって形成され、周りの雪山、原生林及び雲は、まるで絵をはめ込んだ屏風のような風景である。種々の高山植物群落は、成長区分がはっきりしており、いろいろな色彩が入り乱れている。春の咲き乱れる花景色、冬のなまめかしく美しい雪景色は見る術もないが、雲霧がまつわり、嵩山紅色の景色は太陽の光によって湖面に幻のように赤、水色、緑、白の色彩に変化し、その風情は私たちの脳裏に深く焼き付けられたのである。

ハナス自然保護区内は森と草原が互い違いになっており、川と湖が多く、資料によると現在確認されている植物は、789種類（珍種30種を含む）、爬虫類動物39種、鳥類117種、魚類8種で、その中には、国家一級保護動物5種類、二級保護動物13種類、その他の希有動物9種類が含まれており、自然保護、科学的考察に価値のある地区であるとされている。また、ハナス湖周辺にはモンゴル民族及びカザフ民族などの人々が住んでおり、彼等は独特の風俗習慣を持っている。そして中国ではただ一つのモンゴル民族系図互人（トワ人）の居住地でもある。

午後4時、国境稜線を遠望しようと対岸にある展望台、カラキルク峰（2,050メートル）まで騎馬にて出発、3時間かけて展望台に着いた。70キロメートルはあろうか遙か遠く正面にハナス山、東にイユイ峰などの山容を望むも霞がかかって判然としなない。復路は順調に下り、全員が招待所に帰着したのは午後9時、往復5時間有る乗馬で全員憔悴の半日であった。

8月23日 図互人馬方からの情報として、湖畔の断崖上の岩石に壁画があると聞き、基地より往路約1時間半のトレッキングに出発、現地のモン

ゴル遊牧民の協力もあって壁画を発見することができた。彼等の説明によると3世紀頃、モンゴル民族が自由にこの地に入出入りしている頃に残したものと伝えられてきたと言う。

午後、私たちはブララァハン橋の近くに部落を造っている図互人の住居を見学し、彼等の風習による接待を受け、そのもてなしに感激した。

8月24日 ハナス氷河の踏査は断念したものの、周辺の素晴らしい景色と神秘的に満ちたハナス湖、そして地元の暖かい人情に触れることによって十分な満足を得て、ハナス自然保護区を後にしたのであった。

8月25日 ジュンガル盆地西部の砂漠を南下してウルムチに帰る途中は埋蔵量豊富なカラスイ油田地帯である。行けども行けども油田の掘削機塔と汲み上げポンプの密集地帯であった。

8月26日 当初の目的を達成できなかった私たちはその無念な気持ちをボゴダ峰（5,445メートル）に連なる東部天山山脈の天格尔山（テングル山 4,582メートル）にある第一号氷河にぶつかることとなった。

ウルムチからわずか126キロだが、入山には許可が必要であった。氷河の水が流れる川沿いに急峻な山道が続いている。私たちのランド・クルーザーは軽快に走行し、4時間程で3,800メートルの検問所に到着。前夜からの雨が雪化粧となり、峠へ向かうモレーン帯を歩くこと30分、我々は眼前に第一号氷河に触れることができた。

8月27日以降はシルクロード遺跡の見物をし、全走行距離3,500キロの旅は終わった。

月日	ル ー ト	走行距離 km
8月18日	ウルムチ→ジムサル（北庭故城、千仏堂他）	150 (270)
19日	ジムサル→フーエン（カラムリ野生馬保護区）	510 (610)
20日	フーエン→アルタイ（突厥古墳他）	230 (350)
21日	アルタイ→ブルチン→ハナス	310 (310)
22～23日	ハナス自然保護区	-
24日	ハナス→ブルチンカラマイ（ウル木魔鬼城）	390 (490)
25日	カラマイ→アトウビー→ウルムチ	340 (340)
26日	ウルムチ→第一氷河	380 (380)
27日	ウルムチ→トルファン（交河故城、火焰山他）	186 (336)
28日	トルファン（高昌故城、アスターナ古墳他）	- (200)
29日	トルファン→ウルムチ（艾丁湖他）	186 (236)
30日	ウルムチ	-
	計	2,682 (3,522)

但し、（ ）は区間距離に実質走行距離を加えたものである。

※次号に27日以降のトルファン紀行を掲載する予定です。（編集より）

Mexico Iztaccihuatl 山行

三木孝史

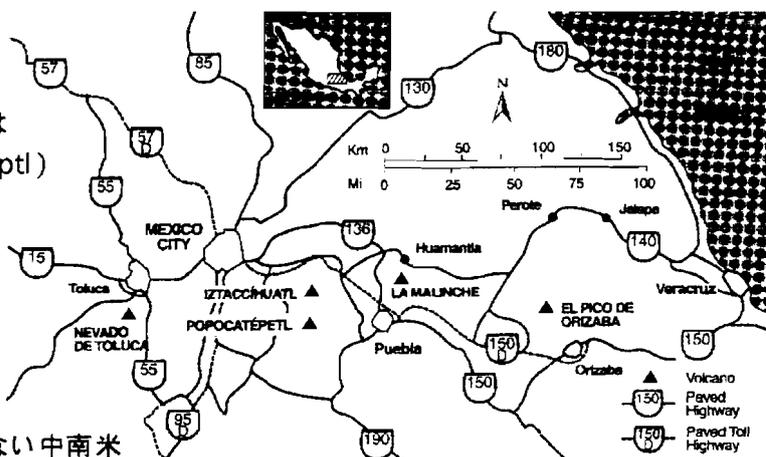
■メキシコ中央高原には火山が多数存在している。いずれも 2000m の高原に乗った富士山のようなもので、難度こそ低いが高標高は 5700m を越えるものもある。

メキシコはバス網が発達しており、アプローチは至極簡単。時間はないが高標高を求める安直サラリーマン山屋には手頃な地域で、中にはアコンカグア遠征の直前高度順化に訪れるものも多い。

昨年9月それらの一つ、イスタシワトルに立ち寄ってきたので報告する。

■今回の山行は出発約1ヶ月前、突然思い付いた。

そもそも下田とメキシコに行ってカリビアンリゾートで遊ぼうという超軟弱な話しにまとまっていたのだが、せっかくだからどこかの火山に行こうということになり、イスタシワトル (5286m) を選んだ。理由は単純。メキシコの火山で高いほうから数え、未経験の所がここだったからである。(1位は El Pico de Orizaba (Citlateptl) 5700m, 2位は Popocatepetl 5452m どちらも 91年に経験)



■山行は失敗に終わったが、市大山岳会ではあまり耳にしないう中南米地域でもあり、今後の参考のため、記録を寄稿する。

■社会人になってからの海外山行記録をWWWのホームページの形にまとめました。

<http://www.geocities.co.jp/Colosseum/3118/Report.htm>

本稿はそこからの抜粋です。

9/7 (Domingo)

筑波→成田 →LA → Mexico City
(CityのHotel Monte Carlo 泊)

Customを出てザックを担ぎ、まず目に付いた両替屋に向かう。Casa de Cambio という看板を出すところともう1軒両替屋があるが、後者は国営なのかやたらとレートが悪い。

両替屋は国際便ゲート近くに少なくとも4箇所はあった。1円 = 0.0625 N\$ (Nuevo Peso)。

ここで下田は3万円、三木は200 US\$ を換金する。

その後、三木のみINEGI (メキシコの国土地理院に当たる) の地図屋空港店を探しに行く。

計画書の地図番号をおっさんに見せ、問いたですが、おっさんのいうことがさっぱり分からない。(スペイン語を知らないので当たり前だが...) ガラス越しに他のガイジンがないらしい旨英語で教えてくれた。店の

おっさんにいつ入荷するか聞いてみたが来週だという。英語は例によって通じない。それを横目で見ていたガイジンは期待しない方がいいとアドバイスをくれた。

9/8 (Lunes)

Mexico City で装備/食料購入
(CityのHotel Monte Carlo 泊)

91年にも装備購入をしたスーパー Aurrera Buenavista へ向かう。ところがいくら探せどスポーツ用品を売っていた一角がない。しょうもない子どものおもちゃやシュラフなんかは置いてあるのだが、お目当ての Camping ガスはとうとう見当たらなかった。がっくりである。

昨夜友人から教えられた Deportes(スポーツ用品)店街を探しに行く。手当たり次第店に入ってキャンピン

グガスカートリッジはあるかと聞いて回る。カートリッジは幸いかなり大き目の物を置いている店が1件だけあった。が、ヘッドがない！この国ではこの手のボタンガスコンロはランタンにしか利用されないらしいのだ。従ってヘッドはその店にも置いていない。キャンピングガスでなく穴を開けてしまう使い切りタイプのカートリッジはどこにでもおいてあった。が、これもランタン(Lampara)用だった。しかたがない。さんざん探し回った挙げ句、固形燃料を購入した。

9/9 (Martes)

Mexico City → Amecameca → La Joya →
Portillo 手前の pass 泊

9:15 起床

しまった。

三木が腕時計でアラームをセットしておいたのだが(この腕時計、時間が2つ表示される)、合わせておいた方にアラームが連動しなかったのだ。前日は早めに目が覚めたので問題無かったのだが、今日は Republica de Chile Hut まで入らねばならない日。これで一気に行動時間が3時間も短縮されてしまった。大失態、命取りである。結局この時間遅れが後々まで響き、敗退を招くことになる。

10:50 TAPO 発 (Terminal de Autobus Para
Oeste; 東行きバスターミナル)

Amecameca 行きバスは Volcanes という会社のカウンターで買う。(古いガイドブックには San Cristobal del Colon と記載してあるかもしれないので注意。

12:15 Amecameca (下界 7500 ft) 着。

下田に荷物番をしてもらって広場を何周かし、タクシーと山道具を置いてそうな店を探すが、見つからない。タクシーは止まっても運転手が乗っていないのは昼休みのせいかな？しばらくして荷物も積みそうな大型のタクシーがやってきたので止め、下田のとこまで乗る。運チャンに山道具屋はあるかと聞くと、知ってるという。そこまで連れていってもらおうが、売ってるものは City と同じだった。

車は一路 道路終点の La Joya (ラ・ホジャ 4000m) へ。タクシー代は N\$200。ポボカテペトルへ向かう道との分岐 Paso de Cortes (3680m) までなら N\$100。

13:50 La Joya 着

車中、運チャンには明日 16:00 に来るよう、また明日居なければあさつてもう一度 16:00 に来るよう伝えておいた。

荷物を降ろした後 N\$200 を渡すとまだ足りないという。明日、あさつて来るためのデポジットが要るのだ

という。

デポジットは結構だが、来たのに居なかったとか言われた日にはたまらない。用心して出し渋っていると No Problema と来た。まあ元々その分は支払うつもりをしていたので結果的にはいいのだが、本当に信用できるものなのか？渋々言われるまま、明日の分 N\$200 + あさつてのデポジット N\$100 を支払う。もし明日下りていれば N\$100 は返すという契約である。用心のため名前を聞かせると言って、車のナンバーと免許証を見せてもらい控えておいた。疑って悪いが、こういうのは契約時の常識だろう。理解してくれることを祈る。

14:25 La Joya 発

駐車場からの踏み跡は2箇所。水平に斜面をトラバースしている道と、すぐ前にある崖に向かって直登する道。前者は草原を下ってから小さな峠に向かう。後者は10mほど上ですぐ左に折れ、斜面をトラバース気味に上がっていく。初めはしばらく前者をトレースするが、5分ほどで引き返し、後者を登り直した。真っ黒な腐植土の上の踏み跡を進むと、途中大きな石に道が上へ続くことを示すペンキ跡のある二セ分岐があったが、我々はペンキに従った。両脇に草の生えた腐植土の上に行く。崖をトラバースする道が続く。

15:25 - 45 駐車場から左に見えた稜線に出た
ところで休憩。

汗をかき風が冷たい。東風少々。行動食を食べ始める。下田はここでいきなりつらそうな息をしている。

心拍数 三木 86/min

線の西側をトラバース気味に下りる。左下から別の道が合流するが、これが、先ほどペンキ跡のところを左へ進んだ道と思われる。紫色っぽい青の花をつけた腰くらいの丈の草が多数生えている。少し進むと再び稜線に出た。道はここから稜線の東側へ入る。

16:45 休憩

先ほどから稜線の東斜面のどこかでカサカサいう音が聞こえると思っていたら、数十M先に牛が3頭見えた。良く見るとちょうどこの辺りが東斜面の放牧地の最高地点になっている。

ガスが西斜面から上がってきていたが、とうとう稜線を越えてしまった。ピーク方面は既にガスっている。頭の上では雷音が轟きはじめた。メキシコのこの時期はまだ雨季の終わりで、午後遅くには必ず雲があたり、天気が崩れる。典型的な天候変化である。先を急がねばならない。

下田はかなり参って、フラフラしている。幸いかなり長いピッケルを持っているので、杖代わりにして歩く事を薦める。

17:35 再び稜線に出る。

稜線の南北側は切り立った崖になっていて、小さなコルになっている。ピーク側の崖がガイドブックにも出ている誤って登りやすい崖(3級程度)だ。稜線南側の壁に青いプラスチックケースが鎖で固定してあって、中に詩集が入っていた。1995年18才で亡くなった女性の遭難碑らしい。下田が遅れていたため、空身で荷物を担ぎに下りる。雨が本降りになってきた。

17:50 行動中止。このコルにテントを張る。
(4300m)

9/10 (Mielcoles)

1:00 起床

心拍数 呼吸数

三木 70 /min 26 /min

下田 104 /min 30 /min

共に頭が少し痛む

3:15 テントや下界の靴等をビニール袋にデポして出発。まさかここまで盗人も上がってこないだろう。(メキシコでは人目につくところに装備を置くのは捨てるのと同じ)

すぐ北側の岩峰めがけて少し登り、傾斜が急になった所から稜線西側へ折れる。オーバーハング気味の岩の直下のガレ場を徐々に高度をあげていく。コルからこの斜面に入るとすぐ、ハングした壁の下にいいサイト場があった。前方に大きなコルが見えている。所々にあるケルンを懐中電灯で探しながら進む。前日の下田の疲れを回復させるべく、水(残り10L)は全て三木が持つ。あの重量感はおそらく総重量 30kg を越えていただろう。

4:00 コル (Portillo 4400m) 通過。

目印は中でテントを張ったらしい大きな円形の石組み。ここからルートは再び稜線東側へと移る。道はガ

レから砂地へと変わった。さすがに火山らしい。

4:15 - 25 砂地の途中で休憩。クラストした雪が砂地に付き始める。

心拍数 三木 104/min

下田 118/min

砂地の道を徐々に高度をあげると、主稜線に東側から入った小さな谷にあたる。ルートはこの谷手前の小さな尾根を主稜線にむけて登ってゆく。ルートははっきりしているが、所々にペンキ跡もある。左手の主稜線には数本の顕著な岩峰が並んでいる。うっすらと明るい空に漆黒の岩峰が並ぶ様は、まるでムーミンに出てきた"によろによる"が並んでいるようで気持ち悪い。シャーベット状の雪の量が増えてきた。

5:15 - 35 幅の狭い主稜線に出た所で休憩。ペンキ跡あり。

頭を遮るものがなくなり、開放感に浸る。下界には City や Amecameca、Puebla といった町の明かりがオレンジ色にいくつも広がり幻想的な雰囲気である。

心拍数 三木 84/min

下田 148/min

稜線の西側の土の斜面を下る。(ガイドブックによれば35m) 潰れて骨組みだけになった小屋跡 (old iglu) の横を通りすぎる。懐中電灯の明かりに前方斜め下、目指す小屋の壁の反射板が光って見えた。

5:50 Repblica de Chile 小屋 (4750m)着。

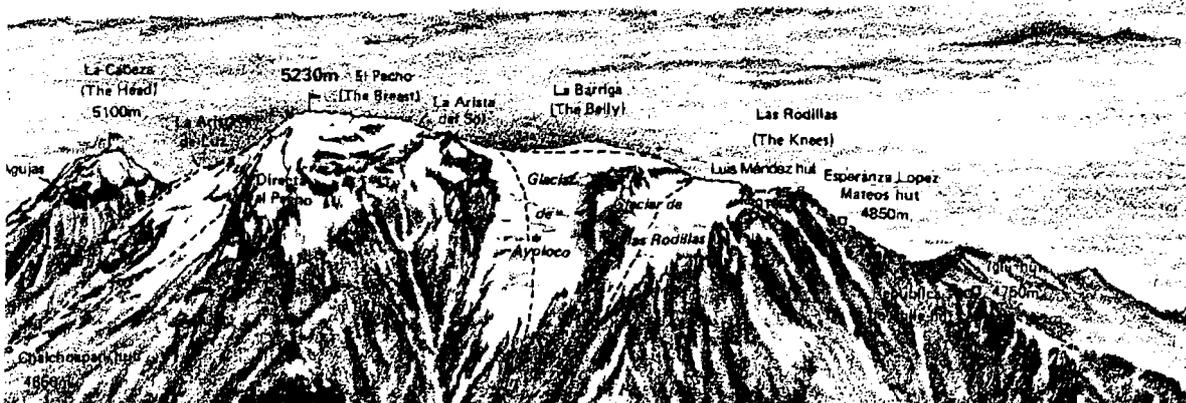
心拍数 三木 112/min

下田 140/min

小屋は主稜線が階段状になって落ちた西側の窪地にある。南側の壁に反射板のついたかまぼこ型小屋は8人収容可能な立派な木製の小屋である。すぐ西隣に潰れかけの小さな避難小屋がもうひとつある。

ピバーク装をサブザックに詰め、アタックの準備をする。

Iziacithuatl from west



7:00 Repblica de Chile 小屋 発

我々は十字架が立つ小屋の東側のポコを登ったが、小屋から稜線沿いに水平に行けば、結局取り付くことになる雪壁の基部に直行できて速い。

この辺りからすこしづつ岩場が出て来るが、全くアンゼイレンするほどのところではない。できるだけ岩場とのコンタクトラインを行く。しばらくして雪壁の基部近くに着いた所で、アイゼンをつける。三木は合わせていたつもりの新しいプラスチックシューズが、ワンタッチアイゼンに合わず、しばらく四苦八苦する。こんなときに限って、団装に入れてきた6角レンチを忘れていた。下田には先にどンドン登ってもらおう。クラストして気持ちよくアイゼンの刺さる雪面をぐんぐん高度をあげる。傾斜は徐々にきつくなり最後は40-45°。

10-20m先を行く下田の歩幅が自分の1.5倍はあって、全然合わず、歩調が急ににぶってきた。早くも数歩進んで十数秒休むほどのペースである。朝のポッカのおかげか、アイゼンの重みのせいか、先が思いやられる。下田本人は疲弊仕切っているというが、今日はえらく元気やなどからかっておいた。

8:15 初めの雪壁の終わりで休憩。

アンゼイレンはせず、急角度の雪交じりの岩稜の上を行く。一個所だけ、岩場を左へトラバースする個所が出て来るが、3級程度。ここを過ぎれば再び雪の斜面になる。この辺り、高度感はかなりのものである。

9:15 雪面をつめて、はじめのピーク

(5010m) にある New Iglu Hut に到着。

Iglu とは言っても雪のブロックを積んだ訳ではなく、富士山測候所のレーダードームのような形をした直径2mほどの銀色の避難小屋である。入口は北側にある。結局この50m 下にあるはずだった Esperanza Lopez Hut は影も形も見えなかった。

ここまでで行程中最も危険な個所は過ぎたはずなので、ゼルプストと若干の捨てロープを残し、ギア類を全てデポする。

ここからは4つの偽ピークが出て来るはずだった。

まず、稜線西側へ下り、次の雪のポコへ向かう。このポコは直登せず、東斜面を斜め上にトラバースして、右側の稜線上へ出る。行く手、右側のカールの底には池がある。このトラバースは結構な急斜面なので、特に気温が上がって雪が腐っているときは注意が必要だろう。

稜線にでたあと、なだらかな鞍部をすぎ、次のポコを登る。ここは余り幅のない尾根になっている。

10:15 尾根を登り切った所。

(おそらく La Barriga ?m)

ポコの向こうが見えて愕然とした。New Iglu Hut からここまでの距離の裕に倍はあろうかと思われるかなたに真のピークらしいものが見える。その途中はひたすら snow field と呼ぶにふさわしい雪面が続いていて、しかも曲がりくねっており、真のピークと見られるポコの南面は露岩があって、どこを抜ければ良いか検討がつかなかった。(行ってみれば抜け道も見えらんだろうが・・・)。

真のピークまではあと3時間はかかるものと思われた。現在のスピード、午後の天候悪化と、snow field でガスられた時エスケープが無いこと、地図がないことを考慮して、ここで行動を断念した。

結局、一昨日朝、3時間寝過ごしたことが後々の日程をずらし、ピークまでの3時間の不足をもたらした結果になった。装備に10万、交通費に10万もかけ、メキシコくんだりまでやってきて登れないとはなんとも情けない限りだがしょうがない。実行力のなさも実力の内である。分かり切ったことだが、昨日 Chile 小屋までの行程は死守すべきだったのだ。

13:00 Repblica de Chile Hut 着

心拍数 三木 100/min

下田 114/min

晩飯の後、三木 98/min.

ダンリッチ + セデスG 各1錠を服用。下田は薬を拒否。

9/11 (Juevez)

5:40 起床

固形燃料ではダブルで使ってもジフィーズ2人分と味噌汁360cc を作るのに 丸1h 以上かかってしまう。おそろしく効率が悪い。

朝食後 心拍数 三木 80/min

下田 108/min

7:45 Chile Hut 発

9:50 La Joya 着

心拍数 三木 102/min

下田 112/min

15:35 Taxi が25分も早くやってきた。

運チャン曰く seguro taxi (安全タクシー) だそうだ。Mexico の印象を悪くされては困るから とも。ちょうど1時間で Amecameca 到着。約束の N\$100 を運チャンに渡し、バス停へ。

16:45 Mexico City 行き バスにのる。N\$ 9/人

ホテルでデポ品を回収し、急いで着替え、旅の第2幕へと出発した。



==== 中/南米で登山しようとする方へ====

1. ご承知でしょうが、中/南米はスペイン語圏です。町で英語は通じません。多少でも勉強していかないと泣きを見る事"間違いなし"です。アコンカグアも同様です。
2. メキシコは比較的安全です。夜半の外出も危険なblockでなければOK。アルゼンチン、チリも白人国家でOK。しかし盗難には重々お気を付けください。
3. ポポカテペトルは 92年以來、噴煙をあげています。窒息死を覚悟の上、お登り下さい。噴火の状況はインターネット上、もしくは地元の登山倶楽部などで調べられます。
4. メキシコの主な火山で登山料が必要なところはありません。アコンは時期によって異なる登山料が必要です。Max 120 US\$ @1月
5. 登山時期としてはメキシコ/アルゼンチンとも正月休みがベストです。でも混んでます。
6. Mexican Volcanoes on WWW
 - ・イスタシワトルの写真
http://volcano.und.nodak.edu/vwdocs/volc_images/north_america/mexico/itza.html
 - ・他人の登山記録
<http://bakmes.colorado.edu/~jones/Mexico/>
 - ・ポポカテペトル噴火状況
<http://tlacaelel.igeofcu.unam.mx/~carlosv/popo.html>
 - ・他 私の HP にもリンクがあります。

7. 装備

基本的には日本で調達して持っていくべきです。ただし食料は現地で入手したほうが安価です。メキシコ、チリしか知りませんが、首都にはコンビニが多数あります。

メキシコシティにはスポーツ用品店街があり、多少の装備なら入手可能です。でも当てにしないほうが懸命です。

燃料はブタンガス、ガソリン系統は×。灯油コンロが best だと思います。

----- メキシコシティの山道具屋 -----

・ ??? (忘れました)

Vennstiano Caranza #19 (1号店) & #31 (2号店)

Efe central y Bolivar

Tel. 510-9496 (1号店),

518-5829 (2号店)

(同じ通りにスポーツ用品店が何軒も並んでいるが、どこもキャンピングガス、それも使い捨て型でランタン用のものしかおいていない。)

・ Deportes Aguillo

Co. Roma esq. Cordoba y Coahuala

(ちょっと 中心街から遠い)

・ Club Alpina mexicana

Tel. 574-9683

8. ガイドブック/情報収集

メキシコ中央高原の火山に関しては以下の参考書がバイブル!

"Mexico's Volcanoes : A Climbing Guide" (English)

R.J.Secor 著, The Mountaineers Books 刊

アコンカグアに関しては以下の書がバイブル

"Aconcagua : A Climbing Guide" (English)

R.J.Secor 著, The Mountaineers Books 刊

また WWW に公式 HP があり、非常に多くの情報が手に入ります。(91年にはこんななかった。くやしい。)

9. 地形図@メキシコ

メキシコの地形図 (catalogue) は INEGI (<http://www.inegi.gob.mx/>) という機関から発行されている。

販売店は各地にあるが、手っ取り早いのはシティの空港店 (開店時間は Week day の 9-21 hrs、1枚 Mex\$20.00)

AEROPUERTO INTERNACIONAL DE LA CD. DE
MEXICO LOCAL No. 61
ZIP CODE 15621 DELEG. VENUSTIANO
CARRANZA MEXICO, D.F. MEXICO
PHONE (5)-786-02-12

最近は Internet

(<http://www.inegi.gob.mx/homeing/centrosventa/carapedi.html>) で order できるよ
うだが、どれくらい早いのかは極めて疑問

Mexico の地形図は以下でも扱っている。

USGS National Mapping Informatio

(<http://mapping.usgs.gov/>)

OMNI Resources

([http://www.omnimap.com/catalog/
index.htm](http://www.omnimap.com/catalog/index.htm))

日本の地図専門店

([http://www.edu.ipa.go.jp/mirrors/rika/NYU
SHU_DB/geo/map.htm](http://www.edu.ipa.go.jp/mirrors/rika/NYU
SHU_DB/geo/map.htm)) からでも取り寄せられる。
但し数ヶ月かかることもある。

因みにオリサバ、ポポカテペトル、イスタシワトル
を登る時の地図の番号は以下の通り。

Huejotzingo E14B4

←Popo と Iztaccihuatl

Coscomatepec E14B46

←El Pico de Orizaba

San Salvador El Seco E14B45

← Orizabaへの approach

10. チケット手配 (中南米方面は以下がお得)

- ・メキシコ観光 (日本人がいます。地球の歩き方に広
告あり)

City店 Paseo de la Reforma 393-A,

Col. Cuauhtemoc 06500 MEXICO D.F.

Tel. 5-525-2669 (533-3913)

Fax. 5-533-1910

- ・HIS

(<http://www.his-j.com/>)

- ・Aero Mexico Reservation Internet

([http://www.itn.net/cgi/get?itn/cb/
wotw/register](http://www.itn.net/cgi/get?itn/cb/
wotw/register))で、フライトの予約/空席状況が

確認できる。登録が必要。

- ・激安航空券情報(CAS Tour)

(<http://www.castour.com/>)

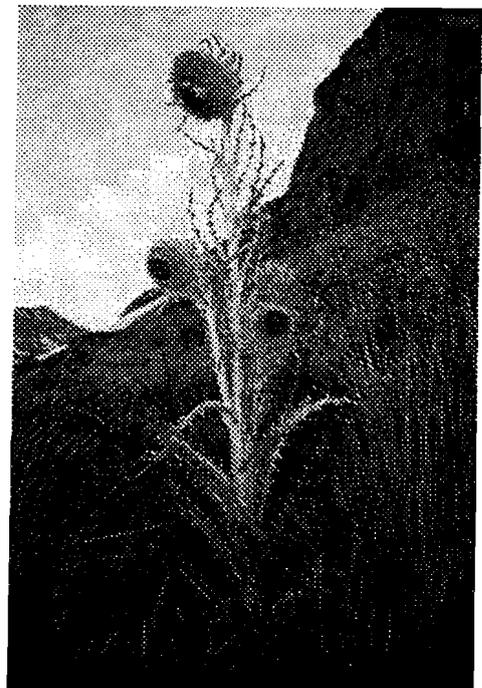
E-Mail で毎週お買い得情報を送ってくれる。

- ・エイビーロード・ネット

(<http://mixj.rnet.or.jp/abroad/index.html>)

- ・南米自由旅行者御用達のJourney

(<http://www2.gol.com/users/jour>)



空木岳（2864m）登山記録 八木信男

参加者：L 苑樹、SL大島（一恭）、山本（勝）、小笹、伴、兵頭、福山、八木

今冬は珍しく山に行く気になり剣山に行こうと思っていたら空木岳に行かないかと誘われ参加することにした。私も含めて、冬山は久しぶりというメンバーも多かったが無事登山は成功した。

12/26（金） 雨

大島、苑樹、八木は夕刻に大阪を出発。ヒュッテには20時に到着。東京から参加の山本氏はすでにストープのお守りをされていた。全員がそろったのは23時ごろだった。伴さんが新製品だというヘッドランプやマットを披露すると、山本さんもゴジラの歯みたいなのがついたスノーシューズを披露。「雪線テレビショッピング」も終わり、雨が止まないのを気にしながら消灯。

12/27（土）晴れ

9：35林道終点1200m－12：00水場1750m－
15：50T S 2400m

雨は止みそうな気配なので8時半に出発。兵頭氏が車のピストン輸送で林道の終点まで全員を送る。大島さん先頭で急登の登山道に行く。雑木林の中の道に雪はそれほどなく快調に水場へ着く。ここからは急登が続き、その後の大地獄、小地獄を巻いている尾根の南側の登山道には階段が数ヶ所あり、雪面のトラバースがあつたりと少々煩わしい。16時まで行動ということだったが、ぴつたりと16時前にテントサイトに最適な台地に到着した。宝剣岳をバックに写真を撮る。テントを張り終えたとき、単独行の登山者が登ってきて、横にテントを張った。よく見ると高校時代の恩師の関本先生だった。実は関本先生とは大学時代に白馬でばったりお会いしたことがあり、偶然に山中で出会うのは2回目であった。空は満天の星、冬山にしては暖かい一夜であった。

12/28（日）晴れ

7：30T S－9：00稜線2600m－11：00空木岳頂上－13：00T S

5時に起床。風もなく穏やかな朝だ。伴さんがテントの外で「行くでー」と他のメンバーを急かしている。先に出発された関本先生のトレースを辿って行く。道は尾根の北側を巻いているがやがて稜線に出た。晴れ

ている間にと空木岳をバックに記念写真を撮る。駒石の手前で関本先生に追いつき市大隊がラッセルを代わる。ここで兵頭さんがすごい馬力で登っていき、先頭は関本、兵頭の両氏となった。残りのメンバーも駒峰小屋に着き、頂上を目指すべく最後の気合いを入れる。しかし、頂上はすぐ上に見えるピークであり拍子抜けする。頂上で360°の展望を楽しむ。携帯電話が通じるのにはびっくりした。出発前に「宝剣まで縦走したら」というアドバイスがあったと聞いたが、距離的にはなかなかものだ。

夕方5時のバスで今日大阪へ帰るといふ兵頭さんは一足先に下っていった。久々の雪の斜面でキックステップを楽しみながら各々テントサイトへ向かった。途中の岩峰でひなたぼっこを楽しむベテランもおられた。

13時にT Sに戻ったが、アルコールが切れている。下山するかどうか。結局、時間的に降りるのは無理と判断し、みんな良い子でもう一泊することにした。複雑系の話やガスカートリッジの構造についてなどアカデミックな一夜が過ぎた。

12/29（月）

8：00T S－9：30伴氏命名のカラマツ台地1950m
－10：00水場－11：00鷹打場1510m－12：00林道終点

アイゼンを着けない「ええかっこしい」の小笹、苑樹のお二人は「こけられへんでー」といいながらも快調に下っていく。大島、伴、山本の三氏も速い。「若手」の福山さんと私は追いつけない。八ヶ岳から南アルプスに連なる峰々を眺めながら、少し物足りなかった冬山におさらばする。林道終点からヒュッテに電話を入れ、久保田氏に車で迎えに来ていただいた。感謝！ヒュッテにてビールで乾杯し、登山成功を祝った。

*帰阪後、剣山に行こうとしましたが、タクシー代を調べたら高いので断念しました。

熊野古道に思うこと

和田城志

お盆休みに小辺路を歩いた。那智の浜で水垢離をとり、小雨そぞろな夜明け前出発、県道、林道、山径とひたすら北上、高野山まで120キロを6日間で歩き通した。紀伊半島を縦断したことになる。生活道であり、山仕事の林道であり、古の巡礼遊行の道である熊野小辺路、いたる所に碑、石像、塚があって、往古を偲ぶよすがにことかかない。

同じ頃、先輩諸氏はあこがれのアルプス、氷雪の峰に登攀の由、22号楽しく読ませていただいた。岩だ氷だ冒険だとホラ吹く僕が、囁く声、溪の瀬音に酔っていたのでは弁解もできない。「どこがアルピニズムや！」ハハハッ、全く。定年祝いに8000メートルをやるかという意気込みや良し!!

ゲーテの詩抄に曰く、

『君は青春時代の過ちを卒業するかしないうちに、もうきっと老年時代の過ちを犯すだろう。僕ら山岳会員は過ちを卒業などしていないんじゃない!! ヘルマン・ヘッセの詩に託してエールを送ろう。』

8月の終わり (Ende August)

もう諦めていたのに、夏は
もう一度力をとりもどした。
夏は、だんだん短くなる日に凝り固まったように輝く、
雲もなく焼きつく太陽を誇り顔に。

このように人も一生の努力の終わりに、
失望してもう引っ込んでしまってから、
もう一度いきなり大波に身をまかせ、
一生の終わりを賭してみることがあろう。

はかない恋こひに身をこがすにせよ、
遅蒔おそまききの仕事しごとにとりかかるにせよ、
彼の行いを欲望の中に、終わりについで
秋のように澄んだ深い悟りがひびく。

僕はこういう心情に到るには、まだ少し時間があると思っているのだが、人様と比べると十分過ぎるほど放蕩してきたから、一生の努力について、その世間的負債を払えるかどうか、秋のように澄んだ悟りが得られるかどうか疑わしい。僕には定年など来ないかもしれない。

僕の依怙地さはさておいて、皆さん、自然の中

に入ろうではありませんか。花鳥風月は良し、しかしそれを山靴でけちらす激しさがさらに良い、気のぬけたビールじゃない、カーンと凍りついたのどごしはやっぱり山小屋ではあきません。ピヴァークですよ。と言いつつ、1997年、8月の終わりを熊野古道に遊んでしまった。廃れた古道は現代の生活にのみ込まれている。最早中世の道ではないが、僕には身に余る喜びを与えてくれた。ひどい靴ずれで苦行というしかない旅ではあったが、これはこれなりに僕のアルピニズム古典文学逍遥ヴァージョンとってよい。ささやかな8月の終わりであった。村の人は別にして、山中、人に会ったのは6日間でたった2人である。

熊野遊行

石垣の苔蒸して崩れおるは
いとなみというにささやかなる山人やまびとの一つ家なり
灰暗ひだき杉林の山霰、斜陽射し入るあたり
晩夏、涼風乱るる夕べなり
赫あかき木肌 燃えてあり
翠あざの若水 輝きらきてあり
うづくまる曇ひまの力漲る刻ときぞなる
古人こじん辿り来り、都人、聖、白拍子しろびょうし
近人も辿り来り、失恋めのご、熟年夫婦、我もまた
汗の雫を吸う石表いしおもてはまるびて
古道は野に開く
誰が手向けし榎えんの小枝
誰が刈り取りし路傍みちわたりの草むら
石仏は養つづかわれおり
古道は培つづかわれおり
「よう来てくださった。まっこと」
棚田に鋤打つ手休め、やわらかき媼おきなの言葉
熊野奥山、賢人の住む鄙ひなの里うるわし
熊野路は幾曲がり、幾山越えて谷越えて
森の沈黙の奥深く、時空の旅の迷い路
森閑たる野辺に道しるべ傾いてあり
右こおや十八り 左りうじん
幸せというにささやかなる媼おきなの背中に
夕陽は沈まんとす、しばし待て!!
ああ、熊野 古の道……

バードウォッチングと手捻り陶芸へトライ

上田忠士

開催日：1997年11月24日

場 所：川勝山荘

参加者：川勝夫妻、藤本夫妻、上堂、小笹、山辻、伴、岡本、西田夫人、
上田夫妻、島川夫妻、宗実、小寺

年一度の恒例のバードウォッチングを今年は比良山麓、川勝先輩の別荘「川勝山荘」で行った。関西地区の会員・会友はもとより遠く東京からも参加者あり、総勢16名によるバードウォッチング。鳥と言ってもカラスとにわとりぐらいしか知らぬ者も参加、首にそれぞれ双眼鏡をぶらさげて出発、鳥のイロハを教わる。川勝山荘周辺の比良山麓から琵琶湖畔まで、川勝さんの道案内と島川さんに鳥名を教わりながら歩くこと約5km、2時間。途中ご婦人方より甘いお菓子と温かいお茶のサービスあり。

田畑で遠望した「ケリ」なる鳥を一所懸命双眼鏡で追う。飛翔する姿は美しい。2～3の鳥名を憶え、やや疲れて川勝山荘に帰ってからは、川勝夫人らご婦人方手作りのぼたん鍋をごちそうになる。フランスワイン「ボジョレーヌーボー」とやらも持ち込まれ、大いに楽しむ。当たらなかった人もいたようだが。

準備をしてくださったご婦人方ほんとにありがとう。お腹がおさまった。

ところで上堂さん指導の手捻り陶芸教室開始。各自指導を受けて、粘土細工に励む。手慣れた者、小学生図工教室以来初めてという者までそれぞれ、おしゃべりしながら創作を楽しむ。各自思い思いにお皿、ちょこetc.を作り、上堂さんに修正をお願いして預ける。上堂さん、準備とご指導ほんとにありがとう。

あとは上堂さんの窯に入れて焼いてもらい完成品となる。これからが大変らしい。上堂さん、よろしく頼みませ。楽しみにして来年まで待ちます。

バードウォッチング、ぼたん鍋、手捻り陶芸を楽しみ、盛りだくさんで楽しい晩秋の一日でした。川勝先輩には大変お世話になりました。7時ごろ再会を期して各自家路に向かった。

※山辻、伴、岡本、上田の4人は前日坊村から武奈ヶ岳へ登り、その日は広谷の高津小屋で宴会泊まり。翌24日下山して川勝山荘にて全員と会う。

総会のご案内

今年の総会は以下のように催されます。是非お出かけ下さい。

日時：3月8日（日） 14時から

場所：宝塚荘（阪急宝塚南口駅下車）

☎0797-86-0787

内容：総会

講演 日本山岳会青年部 ダウラギリI峰登山隊報告
隊長 松原尚之氏

懇親会 16時30分から18時30分

懇親会参加費 7,000円

12月14日午前11時から、大阪駅前のヒルトンホテル真珠の間において池永さんの藍綬褒章受章をお祝いする会が華やかに行われた。池永さんご夫妻をお招きし、会員、会友および同婦人54名が出席した。お祝いの会は藤本さんの司会で始められ、山岳会副会長川勝さんの心温まる受章のお祝いのスピーチ、東京から駆けつけた山本さんの記念品贈呈（ヒマラヤおよび北アルプスの写真集）、三島さんの奥様からの花束贈呈などが行われた。

これに対し、池永さんからは、本日の会に対する謝辞と、ダイヤモンド電機を今後益々発展させて東京株式市場第一部に上場できる企業にするとの抱負が、力強く述べられた。

馬野さんの音頭で乾杯のあと司会者が交代し、佐々木さんが軽妙な進行で座を大いに盛り上げた。市大山岳会の中興の祖である池永さんが当会から始めて褒章受章され、懐かしさと喜びのあまり普段あまり顔を見せない会

員も多数出席した。司会者の指名でもごも、昔池永さん大変お世話になったことや時には厳しい指導を受けたことを愉快に披露され出席者の爆笑を誘った。

祝電披露、大倉さんのリードで全員でホテル中に響けとばかり逍遥歌の合唱、万歳三唱を行い、最後に荻野さんの昔話を交えた閉会の辞で心残しつつ閉会となった。

池永さんの今回の受章は長年に亘る日本自動車部品工業界本部副会長および同関西支部長として、日本自動車工業の発展に貢献された業績に対するものだが、市大山岳会としては我が事のように嬉しく、お祝いをさせていただいたものである。

その気持ちを岡本さんが、記念品に添えられたカードに、長年市役所で研鑽を積まれた名文で書き現されているので引用させていただく。

橋本信行

池永会長

藍綬褒章受章おめでとうございます

“藍綬褒章の受章をお慶び申し上げます。日本の産業界の発展に大きく寄与されましたが、そのエネルギーの源は山登りへの情熱と軌を一にするものであると思われまふ。池永さんには、戦後、大阪商科大学の伝統を受け継ぐ市大山岳部を再建され、幾多の後輩の育成に尽力されました。その結果、北アルプス穂高北尾根その他の峰々に輝かしい足跡を残され、また海外遠征のウルキンマン、モリモトピーク、カンジロバ、ランタンリルン、そして四光峰などの登山を成功に導かれました。このように永年に亘り市大山岳会、山岳部の発展に心血を注がれておられることに感謝し、藍綬褒章の受章を記念して山の写真集をお送りし、お祝いとさせていただきます。ときには写真集をひもとかれ青春の山々に思いを馳せていただければ幸甚にぞんじます。”

出席者：S16三島、S28馬野、信濃、S29大倉、S30荻野、高木、山本、服部、

S31橋本（信）、橋本（洋）、S32川勝（弘）、S33南、松本、北濃、東野、門田、S34清原、藤本夫妻、浅部、S35中村、近藤、小林（深）、上堂、小笹、中島、S36澤田、久保田、川勝（幸）、S38伴、吉田、岡本、橋本（九）、S39常慶、岡野夫妻、S40佐々木、上田夫人、S41藤本夫妻、藤村夫妻、S43島川、S44諏訪、奥田、S45小林（治）、梅島、S56田中、八木、会友 大堀、稲垣、宗実夫妻

<会員消息>

会員 昭17学部 富村恒次郎氏 平成9年10月22日
昭34工 西田 新 氏 平成9年 3月 6日
ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<ご案内>

六人の子どもと山村に生きる 大森昌也著

麦秋社 ISBN4-938170-32-9 ¥1,500

大森さん(昭40法)のお宅に一度おじゃまさせていただいた。昔学生の頃、ネパールで感じたことをそこでも感じた。これが本当の人間の生活ではないのか。日々働いてその日の糧を得る。それで必要十分ではないのかと。自然は懐かしく、6人の子供たちは純粹に、たくましく育ち、都会の子どもにはない素直さを持つ。それに惹かれ都会からの避難場所にするのは、ネパールやインドを訪れるツーリストと同じだろう。都会の生活から山の中へ移り住むのは、生やさしいことではない。大森さんの今にいたる軌跡のように、自分もまた強く自分の道を進まねば、と思わずにいられない。(編集矢倉)

ちょっと大阪弁・・・

- ・映画「セブンイヤーズインチベット」見はりましたか。ハインリヒハラーの著作とはまた違うお話になってましたが、それはまあそれで見応えがありました。本では登山のシーンはないんですけど、映画には割とあるんです。ナンガバルバットを登ってる場面で、相棒の滑落を止めるとこ、あれ、セルフビレイってへんのとちゃうかなあ。あーこわ、とびくびくしました。でもなによりも、ブラッドピットがかっこよかったから許してしまいます。そしてやっぱり、あの懐かしいチベットの平和を祈らずにはいられません。
- ・震災からちょうど3年のあの日、神戸に行きました。ずらっと並ぶ仮設住宅、涙する人々。ほんまにもう3年もたったんか、という感じです。あの地震のことは絶対忘れまいと心を新たにしました。【む】

市大山岳会ニュース
大阪市立大学山岳会発行
会長：池永薫爾
編集：矢倉 睦